
ライバルは17才 メチャクチャ成長が遅い私の記録 下
麻真

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ライバルは17才 メチャクチャ成長が遅い私の記録 下

【Zコード】

Z4505D

【作者名】

麻真

【あらすじ】

ライバルは17才メチャクチャ成長が遅い私の記録上の後編。高校に勤めても卒業できない夢を見つづける主人公は、なんとか人前で歌をうたおうとしますが、なかなかチヤンスが巡ってきません。何度も高校生に置いていかれながら、最後にやっとステージに上がります。

新学期が始まり、新しい生徒たちが入学してきた。お茶目な悪ガキたちを見送った寂しさはまだ付きまとっているけど、気持ちを切り替えて頑張ろう。せっかく引き続きここにいられることになったのだから、この一年をまた大切にしなければならない。

「ねえねえ、一年生すごいんだよ！ 私らが通るとき、道あけるんだよ。私ら一年のとき、先輩が来てもよけなかつたよね。」

二年生になったグリたちが、授業中こんな話をしているのが聞こえてきた。全然すごくなんてない。それが普通なのだ。思わず吹き出しそうになつた。

マコは、この前紹介してくれた彼と一緒に暮らすため、施設を出た。近々結婚するつもりらしい。彼氏はいい人みたいなので、うまくいってくれればいいと思う。

ミヒロは小学校に入り、宿題をやらなくてはならなくなつた。平日のレッスンの日は学校が終わつてすぐ高速バスに乗り、帰ると夜中だから、バスの中で宿題をやる。みんなに迷惑をかけていることもあるし、これがいい区切りかとやめることを提案してみたけれど、ミヒロはやめたくないと言つた。

だけど、その後次々とイベントの予定が決まり、そのたび毎日レッスンに来いと言われるようになつた。毎日来るのが無理だからイベントに出ないと言えば、イベント用に変更された通常のレッスンも見学になる。月謝と交通費を払つて見学だけでは通う意味がない。「やめたくないなら、ばあちゃんに頼んで毎日連れてきてもらう？」

ミヒロに聞くと、

「ううん。これ以上がんばれないから、もうやめる。」

本人が決断し、結局七月いっぱいまでタレントスクールはやめた。生活の中心になつていたものがなくなると寂しくなるので、代わりに前からやつてみたないと言つていたドラマを習わせることにした。運

のいいことに、週に一度、腕がいいと評判の先生が、小学校のすぐ近くの音楽教室に通つてこられていた。今度は学校帰りに歩いて通うことができる。

今年は三年の美術選択者がおとなしい。これが普通の状態なのだろうけれど、去年があんなふうだったから、なんだか物足りない感じがしてしまつ。三年の授業は週一回あり、一緒に過ごす時間が多いため、この授業の雰囲気で私の生活もずいぶん変わるのだ。

三年生六人の選択者の中で、一番元気がいいのはアイちゃんだ。彼女はギターを抱え、友だちとストリートで歌をうたつたりしているらしい。

「私も曲作つてみてるけど、人前で歌つたことってないんだよね。」

「私が言うと、

「先生も一緒にやつてみる？」

アイちゃんが誘つてくれた。私の歌を聴いたことがあるのは、通信のテープを添削する先生だけ。ミヒロにもまだ聞かせたことはない。自分がどれだけ通用するのか試してみたい思いは持つていて、そういう場所が見つからないでいる。ステージに上がって発表する機会のない私にとって、ストリートは興味のある方法だつた。でもこれもルールがあるはず。場所や時間を守らないといけないと聞いたことがある。

「どんなところでやつてるの？」

「いろんなところでやつてるけど、駅が多いかな。」

ちなみに、いちばん近い駅まで、車で二十分近くかかる。

「へえ。つるさいつて怒られたりしない？」

「怒られたら、すいません！つて逃げるんだよ。」

気の小さい私にはできそうにない。それに、私が生徒と一緒にそんなことをしていたら、問題になるかもしれない。やつてみたいけど、やめておいたほうがよさそうだ。

「アイちゃんは将来、プロのミュージシャンになりたいの？」

「わかんない。先のこととはまだ決めてないんだ。もう、ちゃんと決めないといけないんだけどね。」

もう二年の一学期だから、担任からも進路を決めるとせかされるに違いない。

「今のことだが精一杯で、先のことなんて考えられないんだよね。先生は絵が好きだから美術の先生になつたんでしょ？」

アイちゃんが私に聞いてきた。

「……ちょっと違うかな。」

私は絵が好きだから美術の先生になつたのではない。だけど、私が今この仕事を選んだのには、はつきりとした理由があった。

「え？ じゃ、どうして美術の先生になつたの？」

「若い子たちと一緒にいたくて、学校つて職場を選んだんだ。自分が高校の頃つらい思いしたから、同じような悩みを持つてる子の役に立てないかと思つてね。教科は何でもよかつたんだけど、勉強つめ込む役になるのが嫌だつたから美術にしたの。中学の時、絵で大きい賞をもらつたことがあつたし。」

「へえ、そつなんだ。先生も悩みがあつたんだね。どんな悩みだつたの？」

「話すと長くなっちゃうよ。」

「聞きたいやね。」

アイちゃんが同意を求めるとい、他の子たちの視線も私のほうに集まつた。

「そう？ じゃ……どこから話したらいいかな。」

これから話そつとしている過去の中に、私がいまだに高校を卒業できぬないでいる理由がある。

中学に入学した頃、新しい人間関係になじめず、私は教室の中で小さくなっていた。一年生になるときのクラスがえで周りの雰囲気ががらりと変わり、気分が楽になつた。すると急に成績が上がり、単純な私はそれが面白くて、解答用紙の空白を埋めるのが趣味にな

る。校内暴力や非行が毎日話題にのぼる時代。うちの中学もかなり荒れていたから、勉強ばかりしていい子のレッテルを貼られていた私は、周りから浮くこともあった。だけど、学校という場所では、勉強さえできれば一目置かれ、身の置き場がない思いをすることはないことを知った。中学を卒業するまで、私は成績がよいということだけをたよりに、自分の居場所を作っていくことになる。

ところが、高校に入ると、私程度にできる人間はたくさんいた。高校生活自体を楽しもうと希望をふくらませていたのに、入学してすぐ聞かされたのは大学受験の話ばかり。一週間で高校をやめたいと思った。

勉強ができるということ以外に何も持たなかつた私は、中学入学当時のように、また居場所をなくしてしまう。人とうまく関わることもできず、高一の終わり頃には教室にいることさえ苦痛になつて、授業をサボるようになつていた。

その頃、父親のワンマンでやつていた小さな会社がつぶれ、父親が家にお金を入れなくなつた。私と中学生の妹は、母の内職の収入で生活するようになる。あれこれ理由をつけ働くかない父親と、母は毎日けんかをしていた。母に養つてもらつているくせに、私たちを上から見下ろし説教をする、そんな人間を親と呼ぶ気にはなれない。私と母と妹は、家の中でできるだけ父親とすれ違わないように生活した。思わず出くわし、親づらしてものを言われると、言葉にできない怒りで身が震えた。刃物を持っていたら刺してしまうかもしない、と、何度も思つたかしれない。鏡に映る自分の姿に、父親に似たところを見つけると、思わず自分の手首を切り、身体中の血を全部捨ててしまいたい衝動にかられる。私たちを苦しめる、父親に関わるものすべてが憎かつた。

学校にも家にも気持ちが安らぐ場所はない。そして、この世にそれ以外の世界があることも、その頃の私は知らなかつた。ぐれてやうと思つたけれど、近くにそんな仲間もいない。優等生でもなくなり、不良になりたくもない自分が、どうしようもなく中途

ハンパでくだらなく思えた。気がつくと、「その辺の家に火をつけたらおもしろいだろうな」などと、とんでもないことを考えていたりする。かなりヤバイところまできていると自分でもわかつたけど、相談する相手はいなかつた。

どうせわかつてはもらえないと、誰にも自分のことなど話さずにいたのに、担任の先生だけは私の様子がおかしいことに気づいていた。一年に上がるときクラスがえがあつたけれど、担任の先生は同じ問題を抱えた私を、先生が引き続き面倒見ると書いてくれたのだと直感した。

学校へ行く意味だけでなく、生きていることの意味も見つからなかつた。だからといって積極的に死のうとするわけでもなく、本當は生きるということに強く執着している自分がいることも知つていた。生きたかった。何かに一生懸命になりたかった。だけどその何かが見つからなくて、イライラしながらただ時間をつぶした。授業中、文芸部の部室にかくれて、マンガを読んだり居眠りをしていたこともある。別にそれがしたいからではなく、やりたいことが見つからないからとりあえず、である。そのもやもやした気持ちを詩にして文芸部の部誌に載せることだが、唯一自分を表現する手段だった。これが私の十七才。

一年の半ばになると進路の話が具体的になつてきて、なりたい職業を決め、進学する学校を探せと言われ始めた。今何がしたいかわからぬ私に、将来やりたいことなんか聞かれても答えられるわけがない。五年後や十年後なんて生きてるかどうかもわからないのに、そんな先のことを考えるのは、現実離れしたことに思えた。家庭の状況を考えると、大学や専門学校に進学するのは無理な話。妹はまだ中学生だし、私が高校をやめて働いた方がいいくらいの状態なのだ。

父親はその頃、私に「芸大へ行け」と言つていた。中学の写生大会で描いた絵が、文部大臣奨励賞という賞をもらつたことがあったからだ。ご飯も食べさせてくれないくせに、特別金のかかる芸大な

どと、よく言えたものだとおかしかつた。

家の状態を話し、進学なんか考えてないと言つたけれど、担任は私にどうしても大学へ行けと説得し続けた。私の性格だと、大学に行かなければ必ず後悔するというのだ。お金がないなら奨学金や授業料免除の制度もある。寮に入れば生活費も節約できる。バイトもすればいい。あらゆる手段を探し、とにかく大学に行つて、自分が納得する仕事につくべきという。放課後毎日呼ばれ、同じ内容の話が繰り返される。私はそれを、ウザイの半分、暇つぶし半分で聞いていた。だけど、二年の終わり頃にはその言葉もこたえるようになつてくる。今どうにかしなければ、私に未来はない。

十七才の私は、大学に行くことを前提に、自分が充実してやつていけそうな仕事は何かを考え始めた。まず、進路の本を見て、これはやりたくないという職業を消去していく。一日中机についてする仕事は向いていない。とつさの判断とすばやい行動を求められる仕事は無理。退屈な仕事は続かない。取り替えのきく歯車になるのはいやだ。ほとんどの仕事が候補からはずされていく。

毎日変化のある職場。心を病んだことが役に立つ場所。だれがやつても同じ答えが出るのじやなく、私がやつたら私なりの答えが出る仕事。必死で探して、たどり着いた答えは、案外身近なところにあつた。私の思うすべての条件を満たす職場は、私の嫌いなこの学校という場所だった。

教員になろう。教科なんて何でもよかつた。できれば勉強を教えるよりも、生徒とたくさん話がしたい。最初に浮かんだのは養護教諭だった。

「養護教諭は今、ほとんど採用がないよ。」

担任の言葉であつたりあきらめ、何の教科にするか考えた。受験勉強を詰め込む役はしたくない。じゃ、美術はどうだろ。心にたまつているものを吐き出させながら、生徒と関わっていくことができるんじゃないだろか。中学の時賞をもらつた経験もあるし、これなら人に教えることもできそうだ。

「県内に戻るなら、美術もほとんど採用がないよ。小学校教員の課程に入つて副専攻で美術を取れば、中学と高校の美術の免許が取れる。小学校で採用試験を受けて就職して、何年か勤めてから中学に転勤希望を出せば、いつか変われるよ。中学美術で大学を受験するなら「デッサンの実技試験があるから、今からじや、もう間に合わないし。」

担任は言つた。いつたい何年かかるんだろう。全く興味のない小学校を経由する遠回りなどしたくはなかつたけれど、目的の場所にたどり着かなければ何も始まらない。ここはおとなしく、先生の言う通りにすることにした。

そこからいきなり、受験勉強に火がついた。経済的なことを考へると、受けられるのは国立だけ。一年になつてから授業もかなりさぼつていたし、成績も下がつていた。厳しいけれど、私が私として生きていくには、このハードルを越えるしかない。大学に合格することだけ考えて、ひたすら勉強するのみだ。

中学の頃に自宅学習の習慣がついていたから、目標さえできればさほど苦もなく勉強に取りかかれた。平日は帰宅してから五時間くらい、休みの日は八時間くらい勉強する。何も迷うことなく、ただ勉強すればいい生活は、迷つている頃よりずっと楽だった。入試は無事通過。美術の教員になるための最初の切符は手に入つた。

受験が終わつて振り返つてみたら、高校時代、私が本氣で取り組んだのは、受験勉強だけだった。そのおかげで教員免許を手に入れ、今それを使って、生徒たちに囲まれ、幸せな生活を送つていて。だけど受験勉強で詰め込んだ知識は、社会に出て役に立たないものが多かつたから、充実感はそれほどなかつた。青春と呼ばれる、一生のうちで一番美しい思い出を残すはずのとき。何かに夢中になりたいといつう若さゆえの情熱は置き去りになり、私の高校生活は不完全燃焼のまま終わつた。

大学では寮に入り、奨学金や授業料免除の制度に助けられたので、少しバイトをすれば仕送りはしてもらわなくてすんだ。

ここでもやはり人間関係をうまく築くことはできず、落ち込んでばかりいた。文章を間にはさんで、間接的に若い子たちと関わることを夢見るようになつたのは、そんな理由からだつた。けれど、意志の弱い私は、断片的に文章を書きなぐつてみただけで、ちゃんとした作品にまとめるとはしなかつた。遠い山のてっぺんに手を伸ばし、届かず挫折するのもいやだつたし、そういう方向に進んで言い訳のできないところに追い込まれていくのも怖かつた。

行動しないくせに、教員採用試験の時期になつてもその夢は捨てられず、試験は一度見送つた。卒業して家に帰り、近くの中学校に産休の代理で勤めてみると、案外生徒たちとの人間関係はうまくいった。どんなタイプの子たちとも、それなりにつつこんだ会話ができるし、大変なできごとがあつても、生徒がらみならなぜか踏ん張れる。特に、少し悪ふつた子たちといふ時間は楽しかつた。生徒たちと過ごしている私は、学生時代になりたくてもなれなかつた自分そのもの。きちんと生徒たちと向き合つことで、初めて人としての幸せを感じた気がした。

人間関係がうまく築けなくて文章に頼るうとしていたのだから、それができるなら文章の力を借りなくていい気もしてくる。だけど、夢を捨ててしまつることもできなかつた。そのまま臨時教員を続けながら夢も追おうと欲張つたけれど、日々の忙しさや充実感で、いつの間にか夢は薄れ、消えていった。だけどそれは、何かの拍子に思い出したように頭をもたげ、しばらく私の頭の中を支配する。そして、忙しくなるとまた波間に見え隠れし始め、やがて見えなくなつて、そんなものがあつたことさえ忘れてしまう。何度もそんなことを繰り返してきていた。そして去年、サオリが作った本を見たとき、やつと気づいたのだ。迷うのは形にした後だということ。作品も作らずあれこれ心配していた私は、今思うと滑稽だ。

そのときやりたいことを、何ひとつやつてこなかつた私。何もしなかつた後悔は、何かして失敗した後悔よりもはるかに大きい。その痛みはいまだ癒えることなく、卒業できない夢となつて私にのし

かかってく。その状態から脱出するには、やりたいと思つていてやらなかつたことを、これから実行していくしかない。

半分なりゆきで絵を描いているけれど、私にとつては絵よりも言葉の方が、自分の気持ちを伝えやすい。私が一番やりたいことは、今でもやはり、言葉による人ととの対話だ。長い文章でなくていい。歌詞という形で思いを伝えていきたい。今追いかけている夢は、あの時の夢の続きをもあるのだ。

「…今私がここにいるのは、こんな流れからなんだ。」

ひと通り話し終わると、絵を描く手をとめ、アイちゃんが言つた。

「へえ、思つてたのと全然違つたな。先生もいろいろあつたんだね。」

「みんなは私みたいな後悔をしなくて、今やりたいことを一生懸命やつてね。」

「うん。頑張つてみるよ。」

授業終了のチャイムが鳴り、アイちゃんたちは帰つていった。

自分の言葉のよつに言つたけど、最後の言葉はここにきて私が生徒たちに教わつたことだ。今を生きるということ。こんな大切なことを、この年になるまで知らないで生きてきた。誰かの役に立ちたいと思い、この仕事を選んだはずだつたけど、逆に生徒たちから教えられてばかりだ。

臨時の私は、いつまでもここにおいてはもらえない。私も生徒たちと同じ。ここで立ち止まつてはいられないのだ。生徒たちと一緒に、道に迷いながら行き先を探している今の状況は、私にとって百点満点で一百点くらいの、満たされた状態。だけど、高校をきちんと卒業して新しい自分になれたら、今よりもっと充実した、三百点の生活にたどり着ける気がする。

「ママ、私は赤ちゃんができたみたい。」

マコから電話がかかってきた。

「わあ、おめでとう！ もう病院には行つてみたの？」

「それがまだなの。彼が女の先生にしか診てもらつたらダメっていうから、女の先生がいる病院探してるんだよね。」

「へ？…あ、そう。急がないといけないね。私も調べてみるよ。」「ありがとう。これを機会に、ちゃんと籍を入れることになりそうなんだ。」

「それがいいね。体調に気をつけて、赤ちゃん大事にしてね。」「うん。」

電話の声から、マコの幸せが伝わってきた。お医者さんにヤキモチやくくらいだから、大事にされているのだろう。そして彼女は、高校時代望んでいたお母さんになる。

一年目はあつといつ間に過ぎて、この学校に来て二度目の卒業式を迎えた。今年は退場の音楽をかけてから階段を駆け下りることはせず、放送室から卒業生を見送る。

アイちゃんは就職が決まり、街へ出て行く。彼女が胸を張つて「自分が選んだ」と自慢できるものが、そこで見つかるといい。そして私も、次に彼女に会つまでに、漠然とした夢を少しほは形にしたい。

四月。私はもう一年同じ条件で勤めさせてもうひとつになり、私が来た年に入学したグリたちは三年生になつた。今年は文化祭でアコースティックライブをするのだと、グリとヤスコが張り切つている。女子のライブは初めての試みらしい。

「学校でも練習したいんだけど、毎日ギター持つてくるの大変なんだ。先生のギター、学校に置いといてももらえない？」

私がひそかにギターを練習することを知つていて、グリとヤスコがやつて來た。

「わかった。明日持つてくるから、いつでも使って。
私のアコギは、次の日から準備室に置くことになった。

今度の一年生は全体的に落ち着いているが、一人ちょろちょろして立つやつがいる。柴田といつ。遅刻してくることもあれば、来ないこともある。美術だけでなく、どの教科もそんな調子らしい。あまりしゃべらないけど、いつも顔は笑っていて、外見は他の子たちよりもおとなびている。失礼な言葉を使えば、老けている。たまにボソボソとしゃべる声が低くてよく響き、「この子、歌をうたつたらこうのような声をしてるな。」なんとなくそんなことを考えていた。三時間田から一年生の授業。今日は柴田が最初から来ている。例によつて何もせず、教室の中をうろつろと歩き回つては、人にちよつかいを出し、「ヤニヤニヤ笑う。

休憩時間、準備室にいたら、柴田がドアをそつと開けて、中をのぞき込んできた。

「あ、ギターがある！ 誰の？」

準備室に駆け込んでくると、ギタースタンドに立てたギターをいろんな角度からながめる。

「私のだよ。三年の女子がライブの練習するから持つてきたんだ。
「ライブかあ、いいなあ。オレも弾き語りとかやってみたいんだよな。ちょっと弾いてみていい？」

「どうだ。」

やっぱり歌をやつてるのか、と思つたら、ギターをさわるのは初めてのようだ。

「どうやつて弾くんだろ。先生弾けるの？ なんか弾いてみてよ。」

「私？ 私もあまりうまく弾けないよ。」

ギターを弾いている姿を人に見せたことは一度もなかつたから、弾いてみせることにかなり抵抗があつた。だけど、コイツはまだやつたことがないんだから、下手でもわからないか。柴田からギターを受け取ると、尾崎豊の曲の最初を少しだけ弾いてみた。

「へえ。やっぱ、ギターつていい音が出るね。」

私が弾いてもいい音に聞こえたようだ。ちょっとホッとした。

それにも驚いた。まるで、私が「やつてみれば?」とでも言ったかのように、「歌をうたえばいいのに」と思ったそのままの展開になってきてる。柴田は学校に来ている日は毎日、昼休憩にギターを弾きに来るようになつた。まともに弾けない私が、教える側になつてしまつた。

六月に入り、文化祭の準備も本格的になつてきた。

「教室はクラスのイベントで使つてるんだ。練習する場所がないから、準備室でやらせて。」

グリとヤスコがやつてきた。

「いいよ。私は荷物運んでくるから、『じゅつくじどうだ。』

今年は壁や天井、床などをきれいにする大きな工事が入つていて、文化祭前までに美術室と準備室にある荷物を全部運び出さないといけないのだ。準備室の方はもうほとんどカラになつていて、音がよく響くので、気持ちよく練習できるだろ。」

今回の工事、引越し業者を頼む予算がないから、自分の担当する場所は自分で全部運ぶことになつていて。美術室には、重たい石膏像や、捨てられない昔の生徒作品、何に使うのかわからない古い道具など、気が遠くなるほどの荷物があつた。これを一人で運ぶなんて、できるわけがない。三月にこの話を聞いたときにはそう思つた。けれど、その苦難から逃れる方法は、この学校の仕事自体を断る以外になかつた。まだここにいたい。その執念だけで、私は必死にこの無茶な仕事をやつている。半分くらいの荷物は捨てるにしたけど、遠いゴミ捨て場まで運んでいくのはやはり自分。使う労力は同じだ。戸棚など大きなものは手の空いた生徒に手伝つてもらはながら、授業以外の時間はすべて、荷造りと荷物運びに費やしていた。美術室は四階。渡り廊下を使って隣の館のエレベーターまで台車で運び、一階に下りると、エレベーターがある棟とは反対側の講堂

まで台車を押していく。講堂は十数段ほど階段を上った所にあるので、台車はそのまま。そこからは、ダンボールを一個ずつ手で運んでいく。

やつと台車に乗っていた荷物を運び終え、カラの台車をエレベーターに運んでいると、そこまでグリたちの声が聞こえてきた。暑くなってきたから、窓を開けて練習しているのだ。

「誰が歌ってるの？」

下級生が四階の窓を見上げて聞いてきた。

「三年が文化祭のライブの練習してるんだよ。」

「え？ だれ？」

「グリとヤス」。

「へえ、ギターとか弾くるんだ。」

後輩たちも興味を示し始めている。ライブには案外たくさんの人人が集まるかもしれない。

準備室に戻つてみると、なんだか変な空気が漂つている。

「先生つて、歌詞書いたりする？」

グリが聞いてきた。

「たまにね。なんで？」

二人は顔を見合わせて、にやりと笑い、いきなり弾き語りを始めた。「歴史見つめてきたものたちに 想いを寄せる暇もなく 捨てていかなきやならない私を どうか許して…」

あーつー。これ、私がさつき思いつくまま書きなぐつて、机の引き出しにつつこんだ詩だ！

「さやあー。勝手に人の引き出しあけるんじゃない！」

真っ赤になつて、両手でかわりばんこにヤスの頭をポコポコ殴つた。授業中にポコンとやろうもんなら体罰だと騒ぐけど、やはつこんなとき、生徒は全く抵抗しない。

「文字の数ちゃんとそろえたといってくれなきや、曲つけづらこじやん。

「時間がないから後でやるつとせこに入れといたのを、あんたたちが

勝手に引っ張り出したんでしきうが。それにしてもいい曲だった。

この子ら、けっこう才能あるのかも。

「そう言えば、楽器店にオリジナル曲のオーディションのチラシが貼つてあつたよ。私らやつてみようかつて言つてるんだけど、先生もどう？」

「へえ、おもしろそうだね。」

かなり興味があつた。この前通信添削でほめられた曲なら、人に聞かせてもいいかもしない。でも、待てよ…

「それつて、年齢制限あつたりしない？」

「ないない。三十才までだから、全然大丈夫だよ…」

「…大丈夫じゃないじゃんか。」

「え？ 先生つて、いくつ？」

「もうすぐ三十八だよ。」

「もうそんな年なの？ 知らんかった…」

あのグリが黙つてしまつた。外見が若く見えても、精神年齢が未熟でも、実年齢で拒否される事は多々ある。そのオーディションに關しては、私はもう参加する資格がない。

長い間悩まされた、工事のための引越しも終わり、文化祭がやつてきた。例年のように男子のライブが午前中になり、午後にグリたちのアコースティックライブが組まれている。初めての試みだった女子のライブも、思いのほかたくさんの人人が入り、午前中のバンドのライブに負けないくらい盛り上がり上げている。練習の時からずつと見てきたから、自分のことのよううれしい半面、少し寂しかつた。ほんのちょっとだけでいい、私も参加させてもらえばよかつた、ステージを見上げているうち、そんな思いがよぎり始めたのだ。

四月からひたすら荷物運びに明け暮れ、疲れはてていたので、彼女達のライブと自分の夢を結びつける発想なんて浮かばなかつた。思いついたとしても、クタクタの私には、ギターの練習をする気力もなかつただろう。工事がなければ私もあるステージの上にいたか

もしれない。今回もまた、私は見ている人。私にはいまだ、人前で演奏するチャンスは巡ってこない。

文化祭の一日後、

「今日の朝、生まれたよ。」

マユから電話があった。

「女の子だよ。」

「おめでとう！ 一人とも元気なんだよね？」

「うん。」

短い会話だったけれど、マユの声は幸せに満ちていた。彼女はついに、彼女の夢だった「お母さん」になつたのだ。すぐに病院に会いに行きたかったけれど、仕事が休めず、入院中には行くことができなかつた。退院したらしばらく田那さんの実家にいるということだつたので、ずうずうしく押しかけない方がいいだろう。マユがアパートに帰るのを待つて、アカネと一人で会いに行つた。もう夏休みに入つっていた。

「来てくれてありがとう。ミサキだよ。」

マユは、私以上に幸せな人はいないというような表情で、ゆつたりと自分の生み出した命を抱いていた。壊れそうにデリケートなその子は、マユの腕の中でゆっくり瞬きしている。

「抱いてみる？」

笑顔で言うマユに、アカネと二人、顔を見合わせた。アカネが先に手を伸ばす。まだ抵抗することを知らないミサキちゃんは、そのままにマユの手からアカネの腕の中に移つた。アカネはぎこちなく、でも落とさないように気をつけて、ミサキちゃんを胸に抱く。

「かわいい。」

顔をのぞき込んで、アカネが言った。

「でも居心地悪そうな顔してる。私の抱き方が悪いのかな。」

アカネが私の方にミサキちゃんを向け、交代しようと目で合図した。私はそつと手を伸ばす。そしてアカネから恐る恐るミサキちゃんを

受け取つたけれど、アカネと変わらないくらい、私の抱き方もぎこちなかつた。七、八年も経つと、赤ちゃんの抱き方なんてすっかり忘れてしまつていて。というより、生活に追われていた私は、自分の子をゆっくり抱くことさえしていなかつたのかもしれない。最近になつてミヒロを抱くことが増えてきたので、ミサキちゃんはずいぶん軽く感じた。壊れてしまいそうで、すぐにマユの腕に戻した。ミサキちゃんを産むときのこと、生まれてから今日までにあつたできごと、マユは楽しそうに話してくれた。初めての出産、子育てには、たくさん不安や苦労があつたはずなのに、マユの口調からはそんな大変さは感じられない。母になるという夢が現実になつた今を、マユは慈しみ、かみしめ、自分のものにしていくように見えた。三十才でミヒロを産み、自分のペースを乱されることにいら立つてばかりいた私とは大違ひだ。私は、いまだに胸を張つて「私は母だ」と言える自信がない。けれどマユが赤ちゃんを抱く姿は、すでに母だった。

三時間近く話し、マユが夕飯の支度を始める頃に、私たちはアパートを出た。

一学期に入り、夏休みの工事できれいになつた準備室は、柴田たちグループの溜まり場となつていて。一年生の教室は隣の棟の同じ四階で、渡り廊下を渡つてすぐだから、休憩ごとに団体でやつてくれる。六人だつたり、七人だつたり、そのうち半分くらいは、一年生を一回やつている子たちだ。昼にはここで弁当を食べ、カラを散らかしていく。

「弁当のカラは自分で片付けな！」

怒鳴り散らすのが私の日課になつた。私がその子たちと奮闘している間、柴田はひとり自分の世界に入り、ギターを弾いている。

「ストリートで歌いたいんだ。知つてる人の前で歌つてもおもしろくないし。」

柴田が言つた。私も同じ思いは持つていて、私にはまだ人前で

ギターを弾ける力はない。一人で弾き語りというのは、あまりに荷が重すぎる。柴田はまだ、私以上に未熟だけれど、今すぐにでも街に出て歌つてやるうといつ氣満々だ。中途半端な状態を人前にさらすことが、恥ずかしくはないのだろうか。でも、恐いもの知らずのこいつの方が、私よりずっと早く目標にたどり着くような氣がある。「やっぱり難しいな。どうやつたらうまくなるんだろ？」「やつぱり難しいな。どうやつたらうまくなるんだろ？」

ギターを弾く手を休め、柴田がつぶやいた。

「プロになつた人が、高校時代は一日十時間弾いてたとか言つたよ。そのくらいやりや、いやでもうまくなるんじやない？」

「…言葉が出ないね。」

「学校はまともに行つてなかつたらしけどね。だいたいそんな生活なんて、普通できないじゃん。」

言つた後で、ヤバかったかなと思つた。コイツはまねをする可能性がある。柴田は入学した頃、からずつと、まともに授業に出でていないので。家からバスや電車を乗り継ぎ、一時間半かけて通う道のり。一つ乗り遅れれば乗り継ぎがうまくいかず、一時間以上待つこともあらし。学校に着いたら午後、なんてこともよくあるよつだ。このままだと進級できないと、担任の先生から何度も言われているのに、こいつは全然変わらない。一緒に美術室に来る子たちもサボることはあるけれど、一応は「この時間はこれ以上休むとヤバい」というような計算をしている。ところが柴田はそんなことを考えている様子もなく、気の向くままに過ごしているのだ。このままいくと、間違いない！一学期中に結果が出てしまうだらう。

「進級する気あるの？」

時々聞いてみる。

「あるよ。」

いつも返事はそう返つてくれる。

「今日英語に出なかつたらもう進級できないって言つてたんだけど、出なかつたんだ。もうホントにダメなのかな。あやまつたら、

何とかなるかな。」

「え…？」

放課後やつてきた柴田が言つた。来るべきときが来たようだ。」」いつにしては深刻な顔なかもしれないけれど、ことの重さが本当に分かつてゐるようには思えない。謝ればすむといつ発想が軽すぎる。

「ちょっと、あやまつてくる。」

「…たぶん、どうにもならないと思つよ。」

「でも、一応行ってみるわ。」

少し笑顔が引きつってきた。やつと自分の置かれている状況がわかつてきただようだ。この学校のシステムでは、たぶんどうやつても、もうどうにもならないはず。万が一、今回どうにかなつたとしても、本人に変わる気がないのだから、またすぐ同じ状況になるだらう。結局、柴田は今年度いっぱい休学し、四月からもう一度一年生として復学することになつた。それと前後して、一年目の一年生たちも、ポツリポツリと学校を去つていつた。私にできることは何もなく、ただ見送る。準備室はさびしくなつた。

ギターの音がしているのが当たり前になつてゐた美術室には、しばらくすると一年生のバンドの子たちが練習をしに来るようになつた。三年生を中心に、卒業式のあとに卒業ライブといつイベントを計画しているらしく、一学期のうちから練習に取りかかつてゐるようだ。ギターにベース、アンプと次々に道具が運び込まれ、美術準備室はいつの間にか、軽音楽同好会の部室のようになつてしまつた。昼休憩も放課後もかなりやかましい。だけど、見ていると勉強になることもあるし、生徒たちが音楽に向けるエネルギーの中にいるのは心地よかつた。いいのか悪いのか、今年は美術部がゆうれい部員ばかりでほとんど活動していなかつたので、うるさいこと文句を言つるものもいない。

「ドラムできるやつが足りないよな。もう一人くらいいてくれたらいいのにな。」

昼休憩の準備室で、ギターの鶴田がぼやいていた。

「つちの娘がやつてるよ。ためしに一曲やらせてみる?」

半分冗談で言つてみる。ドラムを始めて一年ちょっと経つたミヒロは、最近バンドをやつてみたいと言い始めていたのだ。

「何年生だつけ?」

「今小学校一年生。バンドやりたがつてるんだよね。」

「一年生? ちゃんと曲できるの?」

「ミヒロに合わせて曲弾いたりはしてるけど、まだバンドで演奏したことないよ。」

「一回やってみたらおもしろいかもな。今回は間に合わないけど、文化祭にやつてみるか。」

「いいかもね。」

同じバンドのベース、広川も話に乗つてくる。相手にしないだろうと、半分冗談で言つたのに、一人は本気でミヒロとやつてみようとした計画を始めた。

「つこでに私に歌わせてよ。」

ミヒロのおまけになつてやれりつと思つたら、

「ダメ。ボーカルはいくらでもいるの。」

こつちはあつさり却下された。ボーカルがおばさんじや、カッコつかないつてことだらう。また私は置いてけぼりになるけど、ミヒロだけでもバンドを体験させてやれたら、いい経験になる。

卒業ライブに向け、準備室の楽器は忙しく働きつけた。若者はすこに速さで成長する。初心者もいたのに、毎日聞いていると日に日にうまくなり、簡単に私を追い抜いていく。その活気の中で、部屋の主であるはずの私は、また取り残されて複雑な気分を味わつていた。私もライブがやりたい。どうしてもその壁を越えたい気持ちが、押さえられなくなつてきていた。

私がバンドに入り込むのはむずかしい。だったら下手なギターをもつと練習して、一人で弾き語りをやるしかなさそうだ。もう少し

頑張れば、もしかして卒業ライブにもぐりこむことができるかもしない。ライブの中心になつていいのは、一、二年の時美術を選択していた子のようだ。一曲だけでも歌わせてもらうことはできないか、一応きいてみよう。一月に入り、三年生はもう登校していなかつた。でも、アドレスが変わつていてメールは届かなかつた。仕方がないので、参加することはあきらめた。

いや、どうにかして連絡しようと思えば、何か方法はあつたはずだ。だけど、私はそれ以上動かなかつた。心のどこかに、連絡が取れなくてホッとしている自分がいた。人前で歌いたいと言いながら、自信がなくて尻込みしてしまつたのだ。

弾き語りとなると、苦手なギターをひつかからないように相当頑張らなければいけない。それがなんとかなつたとしても、一人での場を持たせることができかどうか、やはりこわかつた。

だけど、やはりあきらめきれない自分がいて、当日いきなりギターを持つて行つて飛び入り参加することを考えながら練習は続けていた。参加するのは知つてる子がほとんどだから、勇気をふりしほれば、それは許される気がしたのだ。チャンスは準備してから待つもの。いつでもステージに上がる準備だけしておけば、めぐつてきたチャンスをつかむことができるかもしれない。

ついにグリたちの卒業式はやつてきた。たまたま今年は三月一日が土曜日。普通なら学校は休みなのだけれど、卒業式は毎年三月一日と決まつてゐるから、その日に行われた。今年もまた、二階の放送室から見下ろす卒業式だ。今年はかわいらしいオルゴールの曲で卒業生を送り出す。先生たちが退場口に花道を作り始めた。CDのスイッチを押すと、花道に加わるため、放送室を出て階段を駆け下りた。

グリ、ヤスコ、アカネ… 私がこの学校に來ると一緒に入学してきた子たち。一つの学校にこんなに長くいたことはないから、三

年間通して見た生徒を送り出すのは初めてだ。花道を通る子たちとの思い出がよみがえる。出会った頃は、先生の言つことになんか耳をかさなかつた子たちも、三年間お世話になつた先生にちやんとあいさつをして、会場をあとにした。全員が退場すると、私はまた放送室に駆け上がる。CDを止め、後片付けだ。この係をしていると、落ち着いて感傷にひたれない。いつまでも引きずるタイプの私には、その方がいいのかもしれない。

卒業ライブは、その日の午後。学校が休みのミニヒロを家まで迎えに帰り、急いで会場に向かつた。最後まで迷つたけれど、どうしても勇気が出なくてギターは置いてきた。

開演時間ギリギリに会場に入ると、ギターを抱え、準備しているグリたちがいる。え？ 文化祭のライブと同じで男子のバンドだけが出ると思い込んでいた。女子のアコースティックライブもやるんだつたのか。それなら私も違和感なく入り込めたのに、なんて大きなチャンスを逃してしまつたんだろう。後悔している私を置き去りにして、卒業ライブは始まつた。

最初は下級生のバンド。そして、この日のために組んだ、にわか作りの三年生バンド。「つまくはないけど、一緒に楽しもうよ！」そんなステージの上の空気が、会場いっぱいのお客さんにも伝わり、盛り上がつていいく。

バンドが交代する切れ目の時間、鶴田と広川がやつてきた。

「娘さん？」

「そうだよ。」

「今度一緒にバンドやらせてもらつ鶴田と広川です。よろしくお願ひします。」

私には敬語なんて使つたことのない鶴田がていねいにあいさつをし、小学校一年生のガキに深々と頭を下げた。その態度に、ミニヒロ以上に私の方がとまどい、緊張した。こいつら本気だ。ミニヒロを一人前のドラマとして扱い、完成した演奏を実現させよつという気持ちが伝わつてくる。これはいいかげんな気持ちでやらせるわけにいけない。

ない。ぽかんとしているミヒロを押さえつけ、

「あんたもちゃんとあいさつしなさいー！」

無理やり頭を下げさせた。鶴田たちが去った後、

「あんたよりずっと年上の人があるから頭下げに来たんだよ。無理やり頭を下げさせた。鶴田たちが去った後、

その期待に、ちゃんとこたえなきやいけないね。」

ミヒロに話しながら、自分にも言い聞かせる。こっちからミヒロを連れてあいさつしに行くべきだった。私が思っていたより、事は重大だったのだ。身が引き締まる思いで、その後のライブを見た。

男子のバンドが充分に会場をわかせたあと、女子のアコースティックライブをはさみ、中心になっていた三年生のバンドが最後を締めるようだ。三年は男子と女子の仲があまりよくなかったけれど、今日は協力していい雰囲気でやっていた。終わりよければすべてよし。そんな言葉が似合つすぐがしいイベントで、彼らは高校生活三年間の幕を閉じた。

ライブをやりきり、卒業していくグリたち。バンドに入れてもらえることが決まり、目標に一歩近づいたミヒロ。最初の一歩を踏み出すチャンスを見送ってしまった私は、また取り残される。

寝起きの悪い朝だ。またあの夢を見たのだ。三年間一緒に過ごしたグリたちにも、やはり置いていかれてしまった。

やりたいことをやつてみようと決めたけれど、結局私は何も行動できないでいる。人に隠れてこそこそ曲を作つて、ひとりきりの部屋でだけ歌つていたのでは、今までと何も変わらない。外に出なきや。そして、人前で演奏しなきやダメだ。私より未熟なはずの若者にてきて、私にできないはずはないのだ。

今回また、自信がなくてチャンスを見送った。納得いく技術が身につくまで待つていたら、生きるうちにステージに上がる日なんてこない気がする。「うまくはないけど、一緒に楽しもうよー！」ライブで卒業生たちが見てくれたあんな気持ちが、私には必要なんだろう。またひとつ、生徒たちに教えてもらつた。

次々に入学してきては、私を追い越し、卒業していく生徒たち。いつまでも卒業できない私は、つらやましさや妬ましさを持つて、その姿を見送る。いつまでもこのままじゃ、私があの子たちに教えてあげられることなんて何もない。逆に教えられてばかりだ。私は仮にもあの子たちに先生と呼ばれ、授業をし、それでお金をもらつて生活しているのである。先に生まれても、後ろをついて歩っているんじや、先生なんて呼ばれる資格はない。

もう一度十代に戻つて生き直すことはできない。でも、今ここからなにかを始めることはできる。幸いなことに、私はまだ生きている。自分の置かれている状況の中で、最大限に生きようとする高校生たちのように、私もまだ夢を追うことはできるのだ。せっかくやりたいことを見つけたのだから、今度こそ行動してみよう。あれこれ考えているだけじゃなく、まず一步を踏み出さないと何も始まらない。

そんな生き方を教えてくれたのは、たくさんの生徒たちと、私も三十年遅く生まれた、しかも私の中から出てきた小さな娘だ。

グリたちが卒業し、学校は急に静かになった。このときがチャンスと、校則が急に厳しくなる。遅刻やサボリもほとんど無くなつたし、服装も乱れていない。この状態で三月を過ぎ、ある程度定着した四月に新入生を迎えるという計画だらう。

私は四年目も臨時で勤めることが決まった。三年が過ぎ、来た頃とは全く雰囲気が変わったこの学校で、もう一年チャンスをもうつた。

四月から一学年下のクラスに混じり、柴田が復学することになつていてる。始業式の日、早速ギターを抱えて、ヤツは準備室にやつてきた。

「ギターつまくなつたよ。」

弾いて見せてくれたひ、本当に見違えるほどつまくなつてゐる。

「一日十時間弾いたからね。」

「え？」

「…まさか夜中に弾いてたんじゃないよね…？」

夜と昼が逆転した生活をしているようだと担任の先生から聞いていたので、おそるおそる聞いてみる。

「一晩中弾いてたよ。家じゃうるさいって怒られるから、川原行つてね。」

けろつとした顔で、ヤツは答えた。なんてことだ。近所から苦情はこなかつただろうか。一日十時間なんて、ナシかけるようなことを言つてしまつた私も責任を感じた。

「文化祭でライブやるんだ。」

それが楽しみで復学したところ、柴田は初田から張り切つている。

「」の学校では、文化祭のライブは体育館と決まつてゐるが、
「アコギはやっぱリストリートよ。外でやる。」

と、譲らない。

「それは今まで例がないから、生徒会にきいてみないと、できるか

どうかわからなによ。」

「じゃ、きことこしてよ。」

「はー、はー。」

生徒会にきこてみたけれど、やはり、今まで外でやつた例はないからダメだと言われた。体育館のライブに混ぜてもらえば？ と言つても、広いところはいやだと言つ。

「」じんまつしたといひで、マイクなしでやつたいんだ。

「それじゃ、美術室でやつたら？」

私が責任を持つていいこの場所なり、たぶんダメとは言われないだろひ。

「あ、これくらいの広さならこいね。」

柴田もその案が気に入つたようだ。私から生徒会にお願いし、ずつと私がついて見ていくという条件で許可をもらつた。

柴田のために考えた案ではあつたけれど、「これはもしかしたら、私にとつても願つてもないチャンスなのじやないか。今の私でも、この規模ならなんとかなる。いつも生徒の前で授業をしているこの場所で、お客様も生徒ばかりなら、緊張せず自分のペースで演奏できるだろう。思い切つて一緒にやってみよ。」

「ここでやるなら、私にも何曲か歌わせてね。」

「いいね。一緒にやるよ。」

私が用意した場所なのだから、柴田がダメと言つわけはない。話はあつたりと決まった。柴田にとつても私にとつてもこれが初ライブ。今度こそ、「コイツと並んで私も進級し、卒業してやる。人に聴かせられる演奏ができるように、しつかり練習しよう。ココミで人も集めなければ。しつかり宣伝しなきや、四階のこんなへんぴな所に人なんか来ない。」

柴田は、ギターは確かにうまくなつていた。でも歌の方は全く成長していない。せつかくいい声をしてるのだから、基礎の発声練習をやればうまくなるはずだ。

「基礎的な発声練習なんかやってみてる?」

「なにそれ? そんなものがあんの?」

「え? 知らないの? 明日ビデオ持つてきてあげるよ。声の出しが間違つてゐみたいだから、よく見て練習してみなよ。」

「ありがと。」

「他にも見たいつて言つてる子がいるから、見たら持つてきてね。」

「わかったわかった。」

説教されている時と同じ、うわの空の返事。「こいつに物を貸して、ちゃんと戻つてくるんだろうか。次の日ビデオを貸してやつたけど、予感した通り、一度と返つてこなかつた。ヤツがそれを見たのか見てないのかも定かではない。」

そんないいかげんなやつだけれど、音楽のことを何もわからない

まま、とにかくがむしゃらにやってみてるその姿が、自分と重なつて、手を貸したくなる。今回りにいる音楽小僧たちの中で、私のいる場所に一番近いのは柴田だろ?。」いつも私も、田の前の田標は初ライブだ。

それにしても、柴田は学年が下がつても全く懲りていない。去年と同じように遅刻してきて、授業も平氣でサボる。ひどい時には放課後やつてきて、ギターだけ弾いて帰る。文化祭のライブのために学校に来ているようなものだ。新しい担任も私も、なんとか変わらないかと話をしてもうけれど、ぬかに釘。これじゃ今年も、時間の問題で同じ結果が出てしまうだろ?。一回進級を逃して、それでもこの学校でねばるという子はほとんどいない。やめて働くか、通信制の高校に転校するなど、環境を変える場合が多い。柴田もそうなるのでは… 口には出さないけれど、誰もがそう感じ始めていた。

もし途中でこの学校を去ることになつたとしても、この学校にいた時間が、あいつの人生に何かを残してくれるといい。ライブはあいつの人生にとって貴重な経験になるはずだ。一番やりたいことをやつてみるとことで、ヤツも何か変わり、やる気になるかもしれないし、とにかく、今回のライブは成功させたかった。

しかし、文化祭の準備が具体的になつてくる五月半ば、柴田はほとんど学校に来なくなつた。

「文化祭のイベント申し込みの日は絶対来ないと、ライブはできなによ。」

久しぶりに顔を見たとき、釘をさしたけど、
「わかつてゐよ。」

いつも通り、うわの空の返事。そしてその大切な日、やはり柴田は学校に来なかつた。私が申し込みに行くわけにもいかないし、柴田の手伝いでコーラスをする予定の生徒に行つてもらつた。

あんなにライブを楽しみにしてたヤツが、いつたいどうしたといふんだね?。いくらいい加減な柴田でも、ライブを投げ出すなんて

絶対おかしい。何かあるに違いないけど、こつもつるんでいる子たちに聞いても、何も知らないといつ。私同様、仲間たちも柴田の変化を心配していた。

何日か後、家庭の事情で退学しなければならなくなつたと、柴田が担任の先生に連絡してきた。急な話で、担任の先生もとまどつているようだ。今年度中に学校を去るかもしれないとは思つていたけど、…こんなに急に…しかも、あれほど楽しみにしていたライブを目前に控えた今、やめなければならぬなんて。私たちがショックな以上に、本人は相当なダメージを受けているに違いない。だけど、そんな深刻な顔を、今まで誰にも見せなかつた。柴田はそういうやつなのだ。

退学の手続きをしに来た日、柴田は置きっぱなしにしていた楽譜などの荷物を取りに、準備室にやつてきた。

「やめること、まだみんなに話してないんでしょ？」

「…言えないね。」

「みんな心配してゐるから、ちゃんと自分で話しなよ。」

「うん。」

短く答えると、

「ちょっと歌つていいくわ。」

柴田は、ライブをやるはずだつた美術室にギターを持ち込み、歌をうたい始めた。他には誰もいない放課後の美術室に、柴田の声はよく響いた。外でクラブをしている生徒たちにも、きっと届いているに違いない。

一、三曲歌つた後、一息つくと、柴田は立ち上がり、ギターを私に返した。

「じゃあ。」

「身体に氣をつけてね。」

「うん。」

荷物を抱えると、柴田は美術室を出ていった。そこには、ギターが作った空氣の振動の余韻が、静かにただよつていた。この空氣を震

わせていたとき、柴田には、文化祭の日を見るはずだった風景が見えていたんだるつか。ヤツと私の初ライブは幻に終わった。

三年になつても美術をとつている鶴田と広三は、授業中も絵を描きながら文化祭ライブの話ばかりしている。ミヒロと一緒にやる曲は、ブルーハーツの「情熱の薔薇」。速い曲なので、まだ小学二年生のミヒロの体力がどこまでもつかが問題だった。

「この曲は速すぎてる。僕がミヒロちゃんなら断るよ。」「ドラムの先生にさやうと言われたけれど、ミヒロはどうしてもやると言つて張る。

「じゃあ、ここを少し変えて、やりやすくしようか。」

「ダメ！ 楽譜通りにやるつて約束したんだから。」

楽譜を簡単に直したりせず、譜面通りにやるところのが、鶴田たちが出した条件だったのだ。絶対にやつさる。ミヒロは愚痴ひとつ言わずに、とにかく練習した。

ボーカルを誰がやるのかが気になつていて、下級生の女の子に一番人気のある武田くんに決まつていてるようだ。おばさんが立候補してもかなわないはずだ。

「一回先生たちに、ミヒロだけちゃんと合わせに行きたいんだけど。文化祭が近づいたある日、鶴田が言つた。

「そうだね。ミヒロも楽譜なしで最後まで通せるようになつたから、そろそろ合わせてみないとね。いつ来る？」

「明日でもあわってでもいいんだけど。どちらにしても広三はクラブが休めないから、オレだけ行くよ。」

「じゃ、早い方がいいから明日にしよう。ミヒロに伝えてくよ。」

翌日鶴田がうちに来た。ギターとドラムを合わせてみる。いつもはCDに合わせて練習しているから、生の演奏と合わせるのは勝手が違うようだ。ミヒロはなんだかいつもより調子が悪い。曲を最後まで通して、

「もうちょっとと早い方がいいかな。頑張つて練習してきてね。」

鶴田は言った。今日はこれで帰るようだ。

「はい。」

緊張した顔で、ミヒロが答える。鶴田が帰ったあと、

「ギターの音が全然聞こえなかつたから、むずかしかつたよ。」

ミヒロが言つた。自分のドラムの音に消され、ギターがほとんど聞こえなかつたらしい。だけど、そのせいで速度が遅くなつたのでは困る。テンポを決めるのはドラムなのだ。ドラムという楽器の重要さが、最近やつと私にもわかつてきついた。初めてのバンドに、ミヒロも私もかなりのプレッシャーを感じつている。文化祭まで、あと十日。最後の追い込みだ。

いよいよ文化祭前日。やるだけのことはやつた。放課後、体育館でバンドのリハーサルが予定されているので、小学校が終わつたら、ばあちゃんがミヒロを連れてきてくれることになつてついた。全員で会わせるのは今日が初めて。あの時鶴田が一度様子を見に来ただけで、そのあと一度も会わせる機会はなかつた。ベースとボーカルはミヒロがどれくらひできるかを全く知らない。きっと不安なはずだ。

「着いたよ。」

携帯に連絡が入つたので、授業作品の展示を中断し、門のところまでミヒロを迎えて行く。

体育館ではライブの出演者が全員そろい、音響の準備が整つたのを待つてついた。機材が足りないか何か、トラブルがあつたらしく、シンバルとして空気が重い。途中から入つた私たちは、様子がわからなくて、隅っこでおとなしく待つた。スタッフの人々が忙しく動き回り、やつと準備が整つたようだ。

「一番にやるから、こつちに来て。」

ミヒロが呼ばれた。ミヒロはもじもじして、なかなか出て行かない。

「行つておいで。」

背中を押すと、ミヒロは三年生が手招きしてゐ方へゆつくり歩いていった。ステージで緊張することのない子なのに、なんだかいつもと様子が違つ。ドラムの前に座り、準備をする間も、表情が硬い。

鶴田が合図を出すと、ミヒロのシンバルから前奏が始まった。ギターも入り、ゆっくりと前奏が流れていく。そして歌が入る直前に、ミヒロが勢いよくシンバルを四回叩く…はずだったのに、忘れていた…。家ではこんな失敗をしたことはない。なんだか締まらない出だしのまま、でも止まることなく曲は進んでいった。準備に時間がかかって、リハーサルの時間が押しているから、やり直している暇がないのだろう。そのあとは別に失敗もなく、いいテンポでこなしていく。最後までリズムを狂わせることなく、ミヒロたちのリハーサルは終わった。これなら明日はなんとかなりそうだ。

ステージを下りて、ミヒロが私のところに帰つてくると、鶴田がやつてきた。

「だいたいよかつたよ。最初のシンバル叩くとこ、忘れないでね。」「ゴメンね。練習の時には、出だしを間違えたことなんかないんだけどね。」

黙つているミヒロの代わりに、私が答えた。

「じゃ、大丈夫かな。明日もよろしく。」

次のバンドのリハーサルが始まり、私はミヒロと体育館を出た。

「今日はなんだか変だつたね。どうしたの?」

「緊張してたんだよ。」

「あんたでも緊張することがあるんだ。」

「本番より、リハーサルのほうが緊張するの!」

そういうものなのか。経験したことのない私には、よくわからなかつた。ミヒロをばあちゃんに渡し、私は作品の展示に戻つた。

文化祭当日は、朝から小雨が降つていた。ミヒロは九時的一般公開の時間に合わせて、ばあちゃんに連れてきてもらつた。ライブは十時から。準備があるかと、一応体育館に行つてみた。

「別に今は何もないよ。出番は十一時頃、だけど、三十分前くらいには体育館に来てね。」

鶴田がミヒロに言った。初めてのバンドなので、さすがのミヒロも

緊張してこる。コラックスをせるため、文化祭の会場をばあひちゃんと回つてこさせることにした。

「ライブは初めから見たいよね。開演時間までこには来ようか。」

十時に体育館で合つ約束をして、ミヒロと別れた。

約束の十時より少し早く会場に行つてみると、ミヒロはもう来ていた。ゲームや展示の会場を回つてきたけれど、ライブが気になつて、落ち着いて楽しめなかつたようだ。本番が成功してくれるといい。ミヒロはステイックの入つた袋を持ち、緊張した面持ちで出番を待つ。

「もうすぐだから、中で準備して。」

「一つ前のバンドの演奏が始まると、ミヒロは鶴田に呼ばれた。」

「がんばってね。」

ミヒロを見送ると、私はビデオカメラを持って、体育館の二階に駆け上がつた。ミヒロの初めてのバンド演奏だ。よく見えるところから撮りたかつた。一階の通路を歩き回り、ドラムが一番よく見える場所に三脚を立てた。

そうしていりのうち、前のバンドの演奏が終わり、鶴田と広川が、ステージで楽器の準備を始めた。ボーカルの武田くんも現れたが、ミヒロはまだ出てきていない。直前まで見せずに、お客様を驚かす計画のようだ。準備が整つと、

「オレたちのアイドルを紹介します！」

武田くんが、そでに向かつて片手を広げた。少し肩を丸め、ミヒロが登場する。客席にどよめきが起つた。

「子どもお？」

「カワいい！」

女の子の声が飛びかつ。高校生ばかりの観客席に慣れないからか、ミヒロに笑顔が見えない。ドラマにつくと、

「曲目紹介。」

武田くんがミヒロにマイクを向けた。

「アサマ ミヒロです。」

またどよめきが起る。今度は私の娘だという驚きの声だ。

「今日は一曲、彼女がドラムを叩いてくれます！ ジャあ、いこうか！」

女の子たちの歓声があがつた。前奏が始まり、今日は元気よくシンバルが四回鳴つた。それを合図に歌が入る。ステージの前で、女の子たちが飛び跳ねる。男子はステージの端に上がり、ダイブする。練習で一番大変だった間奏の部分も、なんとか遅れずこなした。あとは、最後まで体力が持つかどうかだけだ。テンポを乱すことなく、曲は順調に進んでいく。歓声の中、ミヒロはついに演奏を終えた。

大きな拍手が体育館に響く。

「ミヒロちゃん、ありがとう！」

武田くんの言葉で立ち上がり、客席におじきをすると、ミヒロはステージを降りた。ビデオのスイッチを切り、階段を駆け下りて、私はミヒロのところに向かう。

「よかつたよ。よくやつたね。」

「終わつたあ。」

やつと肩の荷が下りて、ミヒロに笑顔が戻つた。自分を仲間に入れてくれた高校生に恥をかかせてはいけない。そんなプレッシャーの中、こいつは本当によくやつた。

「今日は緊張しなかつた？」

「大丈夫だつたよ。待つてる間、ベースのお兄さんがおもしろい話ををして、緊張をほぐしてくれたから。」

広川は、口数が少ないけど、そんな気をつかうのだ。たくさんの人間に力をもらつて、本当にいい経験をさせてもらつた。こんな感動は、一人では決して味わうことことができない。

全部の演奏が終わり、

「一緒に写真撮ろうよ。」

鶴田と広川が、やつてきた。ミヒロはステイック、一人はそれぞれの楽器を持って、記念撮影をした。ミヒロにとって、一生の記念になる一枚だ。シャッターを切りながら、レンズのむこうでなく、力

メラを向けてここに立っている自分が、ちょっとさびしかった。で
きればこの感動を、私も共有したかった。また私は裏方で、指をく
わえて見ていたのだ。

文化祭のビデオをドラム教室に持つていて、先生に見てもらつ
た。

「リハーサルで一度合わせただけですか？：よくやりましたね。
どうやら、先生を驚かせるようなことをやつてのけたりじ。こい
つはやつぱりスゴイ。

小さな頃から何度もステージを経験してきたミヒロ。ステージの
経験だけ見れば、こいつはたぶん、今私が関わっている高校生のバ
ンドの子たちよりも、先を歩いているだろう。

マイペースな私は、その昔、十才も年下の配偶者に「私のペース
で私の前を歩いてほしい」という無茶な望みを持っていた。当然そ
んなことができるはずはない。しかし最近、私は唯一それができる
私のパートナーを発見した。ミヒロである。こいつの後ろを歩いて
ゆけば、私はいつも、無理することなく自分の行きたいところにた
どり着くことができるのだ。ミヒロについていけば、きっとこいつか
私もステージに上がれる。

文化祭が終わってからも、美術準備室はバンドの子たちのたまり
場になつていて。夏休みが過ぎてもその様子は変わらず、昼休憩や
放課後は常にギターやベースの音がしている。楽器の数も増え、準
備室はどんどん狭くなつていく。

一学期も終わりに近づき、進路が決まる子も出てきた。ミヒロと
一緒に演奏をしたベースの広川は、芸大に行くことが決まった。デ
ッサンもろくにしたことがないのに、二年の一学期になつてそんな
ところを受けたいと言い出したときには、絶対間に合わないと責ざ
めた。だけど、クラブを引退してから毎日予備校に通い、合格を手
にした。高校生の力つて、本当にスゴイ。

クラブをやり、バンドをやり、受験勉強を…こんなにたくさん

のことを抱えながら、高校生たちはす”」にスピードで前に進んでいく。なのに、なぜ私はこんなにゆっくりしか進めないんだろう。音楽をやってみようと思い立つた日から、もう二年以上たっている。高校に入学してから卒業するまでの期間より長い時間が過ぎてしまつたのだ。それなのに、私はまだ一度も人前で歌つたことがない。ストリートでも、文化祭のステージでも、どんな形でもいい。とにかく一度、人が聴いているところで歌つてみたいだけなのだ。たつたそれだけのことが、どうしてこんなに難しいのだろう。この壁を越えないと、次のステップには進めない。

準備室に集まる子たちの話題は、すでに卒業ライブ一色になつている。鶴田と広川は、もつ一度ミニヒロにドラマをやらせることも考えていたが、今年の卒業式は月曜日。ミニヒロは学校があるから、連れて来るわけにいかない。ミニヒロも残念がつたけれど、その計画は流れた。どんな曲をやるか、どういう順番にするか、話はだんだん具体的になつてくる。

去年は三年生と連絡がつかなくて、ステージに上がるチャンスを逃した卒業ライブ。その計画が、今年は目の前で進んでいる。私の行動ひとつで、チャンスは巡つてくるかもしれない。これだけ場所を提供し、協力しているのだ。ほんの五分か十分時間をもらつてもバチはあたらないだろう。でも、誰にどういう形で話せばいい？ 美術の授業をとつていて、ギターを弾きにくる回数も一番多い鶴田が、話をする機会は一番多い。だけど、ミニヒロのおまけでバンドに入れてもらえないかと言つたとき、「ダメ。」と、一言で却下されたことを考えると、言い出しつぶつときた。

迷つてているうちに、時間はどんどん過ぎていいく。もう二学期。このままでは去年の一の舞にならかねない。これだけ条件がそろつ時なんて、もう一度ともしれないのだ。三年生が学校にきている一月のうちに、手を打たなければ。今日鶴田が来たら、思い切つて言つてみよう。

放課後鶴田がやつってきた。よし、今だ。去年言えなかつた言葉を、いちかばちか口に出してみる。

「卒業ライブで、私にも一曲弾き語りさせてくれない？」

できるだけ軽い口調を心がけて言つたけど、心臓はスカイダイビングかバンジージャンプをするくらい大きく打つていた。言葉を投げたあとで、それは私の言葉ではないと知らんぷりをしたくなる私がいたけれど、一度出た言葉はもうすでに相手に届き、役目を果たしていた。鶴田はチラツとこつちを見て、

「ひとりで？ 別にいいんじゃない？ 仕切つてるのは武田だから、聞いてみれば？」

そういうと、自分には関わりがないというように、すぐに田をそらした。必死になつてている人の氣も知らず、そつけない態度だ。ミヒロがドラムをたたいた時のボーカル、武田くんがライブの中心になつているのか。武田くんはめつたにここには来ない。あの様子じゃ、鶴田が武田くんに話をしてくれるなんてことは期待できないから、武田くんに会う少ないチャンスを自分でつかまえるしかない。

数日後、バンドの仲間を探して、武田くんがやつてきた。三年生が登校する日数はあとわずか。このときしかないとばかりに、私はもう一度バンジージャンプにトライした。

「卒業ライブで、弾き語りさせてもらえないかな？」

「弾き語り？ いいじゃん。一緒にやろうよ。」

気がぬけるほどあつさり、私はステージに上がることを許された。わかつっていた。去年だって、私が勇気さえ出せば、同じ返事が帰つてきたはすなのだ。踏み出す勇気。それだけだつた。去年と同じで、まだ自信はない。でも自信というのは、場数を踏んで、失敗しながらつけていくものだらう。最初から自信がある人なんていないはずだ。臆病な私は、当日までにこわくなつて、

「あれは冗談だつたんだよ。」

などとはぐらかしてしまつ恐れもある。気持ちが後ろ向きにならなにように、ふんばらなくては。待ち望んでいたチャンスをやつとつ

かんだのだ。おじけづいて手を離すよつなことは、決してしてはいけない。

卒業式前日の日曜日、毎から音響のスタッフさんをお願いして、会場に機材が並べられていく。それが終わり次第リハーサルに入るので、出演者も全員来て準備が整うのを待っていた。最近買ったエレアコを抱え、私も緊張して待機する。

「はい、じゃ、リハーサルに入ります。」

もう三時になる。時間の関係で、どのバンドも一曲だけしか演奏することとはできない。

下級生が終わって、三年生のバンド。出る人数は多くはないけれど、同じ子がいくつものバンドをかけもちしているので、バンドの数は多い。先にリハーサルをやつてる子たちを見ていて、ギターとアンプをつなぐシールドは自分で持つてくるのだと思ついた。音響の機材と一緒に会場で借りるのだと思つていたので、今日は持つてきていな。誰かに借りなければ、誰に頼もつかと思つていたところで、

「先生、次行つて。」

武田くんが言った。

「はい！」

慌ててギターを持ち、初めてステージの上に上がる。シーンとしていて、すごい緊張感。まず何をしたらいいのだろう。そうだ、とりあえず、誰かにシールドを借りなくてはいけない。

「ごめんなさい。今日はシールド忘れてきちゃつた。明日は持つてくれるから、誰か貸してくれないかな。」

ステージの上から声をかけたら、鶴田が持つてきてくれた。

「ホントにやるとは思わなかつたよ。」

そつと、ステージの下からシールドを渡し、少し後ろに並べたパイプイスの席に戻つていく。冗談だと思つていたのか。それでもんなそつけない態度であしらわれたのだ。

借りたシールドで準備をすませ、イスに座る。

「ギターの音、出してみてください。」

音響のスタッフさんに言われ、弾いてみる。音は出でるようだ。

「マイク、入つてますか？」

マイクに近寄り、声を出してみる。いつも大丈夫なようだ。初めての体験で、手順が全くわからないので、一つ一つの指示を緊張して聞いた。これで整つたのだろうか。どうにかタイミングで始めたらしいのかわからない。

「…もうやつていいのかな。」

ステージの目の前で様子を見ている武田くんに聞いた。

「いいよ。」

準備は整つたようだ。初めて人前で弾き語りをする瞬間が、ついにやつてきた。呼吸を整え、ギターの前奏を弾き始める。いつも練習している狭い部屋と音の響き方が違つて、なんだか変な感じだ。八小節の前奏が終わり、歌が入る。マイクを通した私の声が、初めてホールに響いた。自分の声が、ホールの後ろの壁をぐるりと回つて、時間差で自分のところに返つてくる。さらに違和感が強くなつた。歌いにくい。これつて、人にはどんなふうに聞こえてるんだろう。考えても、確かめるすべはない。もう始まつてしまつたのだから、最後まで歌いきるしかなかつた。歌い終わるまでに、この感覚に慣れることができるだろうか。いつもはもつと力の入つた声で歌つてゐるのに、緊張と動搖で声が細くなる。静かな会場で、生徒たちがじつとこっちを向き、私の演奏を聞いてくれている。

今回のライブのため、一応三曲練習した。去年の卒業ライブで歌おつと練習していた、尾崎の「B O W！」と、TAKUJIの曲が二曲。自分で作った曲を歌うことも考えたけど、人前に出せるくらい完成した曲は高校生に受けないテーマのものだったので、今回はやめておいた。「B O W！」は暗譜できているけど、との二曲はできない。楽譜を見ながら弾き語りができるかどうか、尾崎を歌いながら、楽譜立てに置いた楽譜を見ようとしてみた。だけど、緊

張してそんなもの全く目に入らない。固定されたマイクと自分との距離が気になり、視線がマイクに向いてしまった。もつと遠くを見なくちゃ。あれこれ考へていてるうちに、一曲歌い終えてしまった。

一応ギターは引っかからず弾けた。だけど、結局最後まで違和感は消えず、楽譜を見るような余裕もなかつた。仕方ない、明日は一曲だけでやめておこう。そう思いながらそでに向かつた。

ステージから降り、客席の床を踏んだとたん、足がガクガクし始めた。ステージの上で歌つていたときよりも緊張している。人前で歌をうたつたという事実を、今になつて実感してきたようだ。なんとか荷物を置いてある席までたどり着き、イスに座つた。

「先生、歌うまいんだね。」

ギターをケースにしまつていると、三年のボーカルの子が声をかけてくれた。生徒たちが準備室で練習をしてることはあっても、私が生徒たちの前で歌つたことなど一度もない。何を歌うかも、どのくらいできるかもわからない私を、生徒たちは興味を持つて眺めていたのだろう。ほめてもらえるような出来ではなかつたけれど、思つてはいたよりはできるんだね、という感じだったのではないだろうか。

「ちゃんと歌えてたのかな。」

最後まで違和感が消えないままだつたので、まともに歌えていたのかどうか、自分では全くわからなかつた。

「よかつたよ。明日も頑張つてね。」

「ありがとう。」

人前で歌がうたえた。できはどうでも、それだけです」くつれしかつた。リハーサルが終わつた時点で、まるで本番が終わつたくらい、やり遂げた気分になつていて。明日の本番は、もう出なくともいいような気さえした。

翌日、また放送室で卒業式を眺め、CDのボタンを押して卒業生を送り出した。午後のライブのことが頭にあるせいか、まだ終わつ

た気がしなくて、涙は出なかつた。

式の後片付けをすませると、礼服を着替え、お皿を食べて、ライブの会場へ急ぐ。会場に着くと、もうみんな集まっていた。お客さんも少しだけれど入つていて、一階席が出演者の控え室代わりになつていて、そこで楽器の音を合わせたりしているようだ。私もそこに行き、ギターのチューニングをした。

そろそろ開始予定の一時。まだ人が少なく、さびしい感じだったけど、時間になつたので、最初のバンドがステージに上がつた。卒業ライブの始まりだ。

次々にバンドが演奏していく。ステージの前では、今演奏していないバンドの子たちが声をあげて飛び跳ね、ダイブしたりしている。少しずつお客さんも増えてきた。三年生を中心に、女子もたくさん見に来てくれている。

三年の担任の先生が時々様子を見に来ては、お客さんが少ないといつて暇そうな生徒を引っ張つて来る。もし自分の順番の時先生がいたら、恥ずかしいので今日は遠慮しよう。昨日のリハーサルで歌えただけで充分だ。

そういえば、今日のプログラムは何も聞かされていない。準備の都合があるので、自分の出番だけは聞いておかなければ。武田くんに聞きに行くと、

「先生は鶴田たちのあとだよ。この次の次。」

もうすぐじゃないか。そろそろ準備を始めなきやならない。ギターとバイオリンを持ち、舞台のそでで出番を待つた。

前のバンドが終わり、いよいよ私の番だ。客席をのぞいてみたが、他の先生は来ていない。よし、行こう。ステージの中央へ進み、バイオリンを広げて置いた。シールドをつなぎ、準備を始めたけれど、勝手がわからず手際が悪い。初めての上に、ステージの上に人きり。不安で客席に目をやると、リハーサルの時と違い、ステージのすぐ前にバンドの子たちがいっぱい立つていた。今までのバンドが演奏してた時のように、盛り上げ役をやってくれるようだ。よ

かつた、一人ではない。ちょっと安心する。

もたもたと準備をすませ、イスに座った。いきなり歌うにしては、まだ心の準備ができない。少ししゃべり、気持ちを落ち着かせよう。

「初めてライブに参加させてもらいます！ 私、今までずっと客席で見てる人だつたんで、一回この上に上がつてみたかつたんだ。」

緊張しているせいか、妙にテンションが高くなる。

「今日は初めてで、しかも一人で、すぐ心細いんだけど…」

「一緒に歌つてあげる！」

女の子が叫んだ。

「よろしく！ でも知らない曲だと思う！」

笑いが起こる。

「じゃあ、がんばるんで…」

「がんばって！」

一言しゃべるたびに、生徒たちがあいづちをつたり笑つたりしてくれて、緊張はかなりほぐれてきた。

「それでは、いきます。」

ギターの伴奏を弾き、歌に入る。昨日と同じ違和感だ。自分の声が自分の物じゃないみたいで、いきなり音をはずす。しまった…と思つたけれど、気にしていたらまた失敗してしまつ。気持ちを切り替えて先に進んだ。ギターも、うまくはないけどなんとか止まらずに弾けている。ステージの前では、武田くんを中心にして、生徒たちが手拍子を打ち、リズムをとつてくれている。

この「B O W！」という曲、好きで、何年も前から練習していたけれど、最近一番の歌詞が引っかかり始めていた。これは、わかつたような顔をして、私が歌つていい歌詞ではない。

卒業証書を持たず学校を去つていった子たちをたくさん見てきた。世の中の大多数の人が持つ、高卒という学歴を持たないハンデを埋めるには、相当の精神力と努力がいる。卑屈になるときだつてあるだろう。卒業できない夢にうなされていても、世間の目は私を大卒

とどちらでいて、大学で得た免許を使って働けば、それなりの収入を得ることもできる。高校を中退した彼らが、さまざまな場所で感じる不自由さを、私は体験したことがないのだ。その子たちの胸の中に今どんな思いがあるのか、大卒の学歴を持つ私にわかるはずがない。もしそれがわかつていれば、定時制高校休学中だった元夫と、離婚することもなかつたかもしれない。

尾崎は、高校を中退しても、胸を張つて生きられる場所を持つていた。それは、彼が自分の才能を信じ、わずかな光に必死で手を伸ばし、手に入れたものだろう。だけど、学校をやめていくすべての子たちに、そういう光が見えているわけではない。高校時代の私のように、踏み出す方向さえわからないまま立ち止まつている子たちでいる。人並み以上の苦しみをともなういばらの道を、進んでいくと私が言つのはあまりにも無責任。その苦しみを乗り越えた尾崎の言葉だからこそ、価値があるのだ。

そしてもうひとつ引つかかっていたのは、学歴は安定を手に入れるためだけのものではないということ。夢を手に入れるための手段として、大学を通過しなければならない場合もある。私がそうであったように。

そんなことを考えて、演奏したのは一番とサビの繰り返し。一番は歌わなかつた。

なんとか最後まで詰まらずに、演奏を終える。生徒たちがステージの前で盛り上げてくれていたから、リハーサルよりずっとやりやすく、とにかく楽しい。リハーサルの方が緊張すると言つたミニヒロの言葉がよくわかつた。

「ムチャクチャだつたけど、なんとか一曲終わりました。自信ないから、今日は一曲でやめようと思つたんだけど、楽しくなつてきたのでもう一曲いきます！　TAKUJIの曲です。たぶん間違えると思つので、失敗したら思いつきり笑つてやってください。」

私は二曲目を歌い始めてしまつた。実はこの曲、練習中も最後まで間違わずに弾けたことがない。絶対途中で止まつてしまつ。だけど、

それでも許される空気が、今ここにはあった。

家で練習するより調子よくギターが弾けてしまう。気分つけて下さい。もしかしたら最後までいけちゃうんじゃないかと思つたとき、コードを間違えてとんでもない音がした。ここで知らん顔して「まかす技術はない。私は演奏をピタッと止めてしまつた。一瞬シーンとしたあと、

「ほおら、間違えたあ！」

元気よく叫んだら、音響さんが上を向いて、クワアと大口あけて笑つていてるのが見えた。

「えー？ なに？ 終わったの？」

「もお！ 先生、途中で投げちゃダメじやん！」

女の子たちがブーブー騒ぎ出す。実は歌詞はあと一行しか残つてなかつたのだけれど、普通に終わるよりこの方が面白かつたかもしない。

「続きはTAKUJIのCDで聴いてねー」

「なによおー！」

怒つている女子たちに笑顔で手を振つた。もつ彼女らも、しうがないなという顔をしている。イスから立ち上がり、おじぎをすると、「ありがとう！」

自然にこの言葉が出た。いつもステージの下で聞いていたありがとうは、こんな気持ちで発せられていたんだ。あたたかいという言葉でも熱いという言葉でも、表現しきれない充実感を抱いて、私はステージを降りた。

心配していたギター以上に、歌がボロボロで聴けたものではなかつたけど、ステージに上がり、生徒たちとひとつになれたことがうれしかつた。リハーサルと本番は全く違う。本番はテンションが上がり、とにかく楽しかつた。自分が演奏する側になり、この空気を味わつてみたいと、ずっと望んでいたのだ。リハーサルで満足して、本番をやめてしまわなくてよかつた。やはり、本番のステージに上がらなくては意味がない。

そしてひとつ、今回発見したことがあった。ミヒロの心臓に毛がはえているのは、私譲りらしいということだ。私も本番が始まつてからは、とにかく楽しくて仕方なかつた。

プログラムは次々に進み、四時間にわたる卒業ライブは終わりを告げた。後片付けはあつという間に終わり、お祭りが終わつた寂しさとともに、三年生たちとの別れの実感がやつて來た。

機材を借りるためにかかつたお金を割り勘にする計算をしていたから、

「いくらかな？」

武田くんに聞いたら、

「先生からはもらえないよ。」

と、どうしても受け取つてくれない。唯一社会人の私が生徒たちにおんぶしてしまつて、居心地が悪かつたけれど、彼らの心遣いを受けたことにした。

楽器を抱えた彼らは、会場を出るとさり気ないあいさつを交わし、一人一人と去つていく。今度この子たちの顔を見るのはいつだらう。これから新しい場所で、それぞれにこの続きの人生を綴つていくのだろう。沈みかけた陽の光の中、私も車に乗りこんた。

車を出すと、今日のできごとがよみがえつてくる。整理しきれない気持ちがこみ上げてきて、なぜか涙が出てきた。運転中に前が見えなくなると困るので、慌てて目をパチパチしていると、涙が鼻に伝つてくる。私は鼻をすりながら車を走らせ続けた。一体何の涙なのか、自分でもよくわからない。もしかしたら、これが生まれて初めて流す、やり遂げたあの涙なのだろうか。

私は教室のまんなか辺りの席に座つていた。教室の中には昔の同級生や今の教え子、過去に教えた卒業生も座つていて。教壇に立っているのは私の高校時代の担任だ。おかしな光景なのだけれど、不思議と違和感はない。

今日は卒業式の日で、どうやら今は、式の後のホームルームらし

い。先生はいつも通り長々と話をしていたが、いきなり私を指差して言った。

「こいつを見てみなれ。こんなに長い時間かけて、やつと卒業するんだよ。」

みんなの視線が私に集まる。その目はみな優しく、どこからか拍手が起きて広がつていった。教室の中は、今まで味わったことのないあたたかい空気で満たされててこる。胸がいっぱいになり、涙がボロボロとあふれた。

…田頭をつたう涙をぬぐつて田が覚める。夢だった。高校を卒業する夢。実際の卒業式には揺つても出なかつた涙が、枕をぬらしていた。

卒業式。生徒たちがそれぞれの道を見つけ、私を追い越して巣立つてゆく。卒業できず、先の見えない私は、ひとり取り残される。今まで三回、そんなふうに卒業生を見送つてきた。だけど、今回は違う。素直な気持ちで卒業生を送り出すことができたのだ。どうしても崩せなかつた壁をやつと壊し、初めの一歩を踏み出したことで、長い間止まつたまになつていて、私の時計が動き出した。二十一年遅れで、あの子たちと一緒に、私もやつと高校を卒業できたのだ。もう、追い越していく高校生の背中を、羨望のまなざしで見送ることはないだろう。

あの卒業ライブから一年たつけれど、高校を卒業できない夢はあれから一度も見ていない。正式な美術の先生が転勤してこられるこの春まで、私はその高校に臨時で六年も勤めさせてもらつた。そして、そのあとめぐつてきた仕事は、高校時代の担任の先生が校長をされている高校の非常勤講師だった。私が着任するのと入れ代わりに、先生は転勤された。

今度の仕事は非常勤だから、経済的にはまた厳しくなった。小学校で常勤の仕事を探す方法もあったのだけど、道端の草を食べてもいいから、好きな高校生と過ごす方を選んだ。お世話になつた先生に呼ばれたことにも、不思議な縁を感じたのだ。

ライブのあと、私は近くにボーカル教室を見つけて通い始めた。去年はミヒロのピアノやドラムの発表会にも一緒に参加。そこでミヒロとオリジナルの曲を演奏することもできたし、ライブハウスのステージでバンドを体験することもできた。次の目標は、ミヒロと二人でオリジナル曲のCDを作ることだ。高校生たちと一緒に見つけた夢の続きを、私も確実に歩き続けている。ちゃんと地面に足をつけ、一步一步踏みしめながら。

私は一人前の画家にも、作家にもミュージシャンにもきっとれない。それでいい。そんな肩書きを手に入れることがより、生きている実感を噛みしめることだけ考えて、残った人生を使い切りたい。死ぬ時に立っている場所がゴール。それがどこなのかは、今はまだわからない。

そんな私の最大のライバルは、永遠に続いていく十七才の青春たちだ。すごいスピードで成長している彼らは、あつという間に私を追い越し、私のそばを去っていく。だけど、途切れることなく新たな十七才が現れ、次々と私に刺激を与えてくれる。ゆっくりしか進めない私も、彼らから浴びるエネルギーがあれば、かなり速度を増していく。ひとつ夢がかなつたら、次の目標をさだめ、またそこに向かって歩いていこう。ずっと十七才をライバルにして。

ミヒロは十七才になつたとき、いつたいどんなライバルになつてくれるだろう。今からとても楽しみだ。ミヒロに引っ張られるようにして今を生きている私が、まず自立しなくてはライバルになれない。その日までに、私も自分ひとりの足で前に進めるようになつてみたい。

(後書き)

非常勤になつて時間に余裕ができたので、初めて小説を書いてみました。小説を書くことがこんなに大変なことだとは思つていませんでした。長い文章は、絵と違つて全体像が見えず、何度書き直したことか…一年半もかけて、やつと完成です。

仕上げたつもりでも、読みにくい部分がたくさんあつたかと思います。最後まで読んでいただき、ありがとうございました。

登場人物のモデルのみなさん、長い間お待たせしましたが、やつと読んでもらえるようになりました。実はあの時、そんなこと考えてたのか、と、驚くこともあります。皆さんのおかげで、卒業できない夢から開放されることができました。この話に出てこなかつた私のライバルたちにも、とても感謝しています。本当にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4505d/>

ライバルは17才 メチャクチャ成長が遅い私の記録 下

2010年10月11日16時36分発行